

いつ振りだろうか、両親の手を握ったのは。

二〇一五年九月、シルバーウィーク。両親と共に、三泊四日の金沢旅行をした、その帰りのことだ。私は現在大学三年生で、地元の鹿児島を出て広島の大学に通うため、実家から離れて寮生活をしている。シルバーウィーク明けと同時に大学の後期が開始するので、私だけは金沢から鹿児島ではなく、途中下車して広島の方へ戻る予定になっていた。

のっぺりした顔のサンダーボードから大阪駅で乗り換えた新幹線の中。私の降りるべき停車駅が近づいて、新幹線は緩やかに速度を落とす。私はキャリーバッグを転がして、通路に立った。席に座ったまま、父が「元気でね」と手を差し出した。続いてその隣、窓側の奥の席から母もこちらに手を伸ばす。私は驚いた。こういうとき、両親はただ手を振るだけで、握手を求めてきたことはなかったからである。私は少し迷ってから、まずは父の手を、次に母の手を握った。乾いた皮膚、厚みのある父の掌。骨ばった母の指先。久しぶりに触れた両親の手は、とても小さくなっていたように思う。けれど、変わらず温かかった。

私はホームへ降り、まだ新幹線の中から手を振っている両親に手を振り返した。そして雑踏に流されるまま、ふたりの乗った新幹線が発車するのを見送ることなく、ホームを立ち去った。視界は滲んでいたけれど、私の足は迷わずまっすぐに進む。新幹線から在来線に乗り換え、それからバスに乗って寮へと戻るあいだ、私の頭の中には両親の姿が浮かんでいた。

帰省するたび、なんだか両親が小さくなっていくように思っていた。ぼんやりと感じていただけのそれが、手を握った途端、現実味を帯びた。

記憶の中にあるのは、まだ私が幼い頃、夏祭りの人混みを歩いたとき、よく転びそうになる私を引っぱりあげてくれた大きな掌だった。すっぽりと包みこまれていたはずの私の手は、いつしか父と母の手を握り、対等に握手できるようになっていた。そのことに気付いて、私はひどく動揺した。

それは、私が成長したということだけでなく、両親が老いたということの証明でもある。しわも白髪も増え、少しずつ身体が衰えていく両親。祖父母を見送ったように、いつか、両親を見送らなければならない日がくる。見送ることができたら、いい方なのかもしれない。私は地元で就職するつもりもないから、両親とともに過ごせるのがあとどれくらいなのかわからない。漠然としていて、他人事のように思っていた未来が、唐突に私の目の前へ転がり込んでくる。そのときがやってくるのは、たぶん、今すぐではない。それでも、いつか必ず訪れる。私には、それが恐ろしかった。

昔から、誰かと別れる瞬間がなによりも嫌いだ。友人と騒いだあとの嫌に静かな帰り道も、肌の黄色くなった祖父が燃え尽きたあとに残された灰も、寮生活へ戻るために両親に背を向けるあの瞬間も、すべて憎らしい。それなのに、何度でも別れは訪れる。

別れ際になるといつも、両親はなんだかおかしそうに笑い出す。きっと気付いているからなの

だろう。たとえば駅の改札口で。たとえば実家の玄関先で。たとえば新幹線の窓越しに。別れる間際になって急に、私が頑なに唇をかみ締めて無口になることも、それでも必死に口角をあげて手を振る理由も、すべて。

寮に帰れば、快活な他の寮生や頼れる寮母さんがいる。大学に行けば、気の置けない友人や厳しくも優しい教授陣にも会える。私は孤独ではない。両親のいない日々を、また笑って生活できる。別れ際の悲しみが嘘のように消え、学業に没頭できる。それでも、別れの瞬間だけは痛いほどさみしくて、何度繰り返しても慣れそうにない。

なんてことはない、ありふれた別れだ。ただお互いの手を握るだけの、何気ない挨拶だ。それでも私には、特別な別れの儀式のように思えた。

兼六園で写真を撮るのに夢中になって迷子になりかけた父と、歩き疲れて不機嫌そうに唇を尖らせた母。そんなふたりを子供っぽいと笑う一方で、子供のように別れ際に意地を張る私ももう、成人した大人だ。両親の掌はその事実を私に差し出して、お前は大人になったのだと、最期まで一緒にはいられないのだと言っている気がした。私の背を見送る両親のように、いつか私も、誰かの背中を笑って見送れる日が来るだろうか。絶対に目を背けてはいけない別れに、「またね」とは言えない別れに、私は耐えきれぬだろうか。

私の心までぐらぐら揺らしながら、バスは山道をのぼっていった。